「こし（越）」の来歴

李　　国　棟

【キーワード】くし・こし・越・鉞・璜

1．シリーズ研究のテーマ――「内越」と「外越」の交流

本論は、筆者が縄文・弥生時代における日本列島の「外越」と長江下流域の「内越」との関係について書いた三篇目の論文（注1）である。長江下流域の越族の歴史を記録する『越絶書』巻八に、「無餘　初めて大越に封ぜられ、秦餘望の南に都す。千有餘歳にして句践に至る。句践　治を山北に徙し、東海を引属す。内外越　別に封削す」（注2）とある。この記述からも分かるように、句践よりずっと昔から越族は「内越」と「外越」に分れ、それぞれ自分の支配地域を有していたが、句践が東シナ海まで勢力を伸ばすと、「内越」と「外越」の支配地域はもう一度画定された。「内越」は言うまでもなく長江下流域の越族を指しているが、しかし、「外越」はいったい誰を指しているのだろうか？「外越」は南方の「南粤」を指していると考える人がいるが、筆者は別の意見を持っている。『越絶書』巻八には、「外越」に関する次のような記述が見られる。

> 政は号を更めて秦の始皇帝と為し、其の三十七年を以て東のかた会稽に遊す。（中略）正月甲戌を以て大越に到り、都亭に留舎す。（中略）是の時、大越の民を徙して余杭、伊攻、□故鄣に置く。因りて天下の罪適ある吏民を徙して、海南の故大越の処に置き、以て東海の外越に備う。乃ち大越を更名して山陰と曰う。

末尾近くの「東海の外越」という言い方が非常に示唆的である。「東海」はすなわち東シナ海の略称なので、「外越」が東シナ海の外側、すなわち長江下流域から見る場合の向こう側にいることが明らかである。さらにこの言い方と前の引用の「句践　治を山北に徙し、東海を引属す。内外越　別に封削す」と結び付けて考えると、「外越」は決して南方の「南粤」を指しているのではなく、東シナ海の向こう側の日本列島に住み、そこを支配地域としていた人びとを指しているのではないかと判断される。そして、秦の始皇帝は越国を滅ぼした後、こちらの「内越」と東シナ海の向こう側の「外越」の交流を断つために海岸に近い越族の民を強制的に奥地に移住させ、その代わりに他の地方の犯罪者をそこに入れ替えたということからも分かるように、「内越」と「外越」は越国が滅亡するまでずっと交流を行ってきた。これまで、日本の考古学者や歴史学者は縄文時代や弥生時代について詳細に調査し、さまざまな角度から論証してきた。しかし正直にいって、先学方の研究成果を読んでいるうちに、もし「内越」と「外越」の交流という角度から

論じれば、その本質や意義がより鮮明になってくるのではないかと思うことも何回かあった。そこで、本シリーズ研究を構想し始めた。

「内越」と「外越」はもともと同じく古越族に属し、東シナ海の大陸棚に生活していた。しかし、13000年ほど前、地球温暖化がもたらしたammonia海進によって古越族が分かれてしまい、中国大陸の長江下流域に移転していった人びとは「内越」となり、日本列島に上陸した人びとは「外越」となった。にもかかわらず、縄文前期以降、彼らはまた往来して交流を始めた。彼らの交流の実態を明らかにし、縄文時代と弥生時代に与えたその影響を論証するのが本シリーズ研究の目的であるが、「内越」と「外越」の交流をテーマとした本シリーズ研究から、縄文時代と弥生時代を捉えなおす新しい契機が出現すれば、筆者の最大の喜びである。

2．漆の源流

1975年８月、福井県若狭湾の鳥浜貝塚遺跡から縄文前期の赤色漆塗りの飾り櫛（末頁の写真１）が出土し、それによって重要な事実が二つ明らかになった。一つは縄文前期にはすでにハイレベルの漆工芸があったこと、今一つは縄文前期、若狭湾の人がすでに頭に櫛を飾っていたということであるが、論理的に推測すれば、この二つの事実には若狭湾を含めた「こし（越）」地域の来歴、すなわち「こし」がなぜ「こし」と呼ばれてきたのかという問題を解き明かす基本的な情報が含まれているにちがいない。したがって本論では、鳥浜貝塚遺跡から出土したこの赤色漆塗りの飾り櫛を切り口として「こし（越）」の来歴について考察してみたい。

これまで、北海道恵庭市カリンバ遺跡、岩手県盛岡市萪内遺跡、青森県八戸市是川遺跡、埼玉県後谷遺跡などの遺跡から縄文後期と晩期の赤色漆塗りの飾り櫛が出土したが、鳥浜貝塚遺跡から出土したこの赤色漆塗りの飾り櫛はそれらよりも2500年～3000年ほど古いから、漆の起源に関する研究がそれによって一気に活発になり、鳥浜貝塚遺跡のこの櫛を長江下流域の炭素14年代7000年前の河姆渡遺跡から出土した赤色漆塗りの椀や筒と結びつけて考察し、日本の漆は縄文早期、長江下流域から伝わってきたのではないかといったような意見が現れた。

しかし2001年８月、北海道函館市垣ノ島Ｂ遺跡から漆糸と思われる糸で編んだ編布状の品が出土し、そしてのちに、その品の炭素14年代は約9000年前に遡るという測定結果が発表されると、日本の漆使用は長江下流域の漆使用より2000年も早かったと思われ、漆使用の技術が長江下流域の伝来よりも、むしろ日本独自のものだと見た方がよいのではないかと日本の一部の学者は主張し始めた。とはいえ、日本列島には漆の木が自生していないし、9000年前に北海道函館市一帯は漆の木が育つまで気温が上がっていたかどうかという疑問も残っているので、約9000年前という数値はにわかに信じられない。実は近年、長江下流域の杭州湾に位置し、炭素14年代8000年～7000年前の跨湖橋遺跡から漆樹科の「南酸棗」（Choerospondias axillaris〔Roxb.〕Burtt et Hill.）の種が検出されている。漆自体はまだ見つかっていないが、漆が用いられた可能性は充

分考えられる。黒潮が東シナ海を北上し、その支流が対馬海峡を貫流して寒冷乾燥の日本海側を温暖湿潤に変えたのは8500年前以降である。環境考古学のこの研究成果と結びつけて考えると、温暖湿潤になった時期が長江下流域よりずっと遅かった北海道函館一帯で跨湖橋遺跡の「南酸棗」よりも更に1000年も早く漆の木が育っていたとは到底考えられず、日本の漆使用は長江下流域の漆使用よりも早かったという主張は環境との整合性に欠けていると言わざるをえない。

縄文草創期から晩期までの各時代の遺物が残っている鳥浜貝塚遺跡から、縄文前期以降、ヒョウタン、牛蒡、リョクトウ、エゴマなど長江下流域から伝わってきたと思われる植物が大量に検出された。この事実は、漆の木も実際その時にそれらの植物とともに長江下流域から伝わってきたことを示唆しているように思われるのである。

3.「くし」の伝来ルート

縄文前期から晩期まで日本各地から出土した漆塗りの品を点検してみると、漆塗りの櫛が非常に多い。すなわち、日本では漆の起源が櫛と密接にかかわっているように思われる。和語では、櫛のことを「くし」という。「くし」はもちろん名詞であるが、それと一音の差で「くす」という動詞もある。そして、和語の品詞変化規則から考えれば、この「くす」は「くし」の動詞形だと思われる。「くす」の当て字は「越」で「越す」と表記されるが、同じ表記を持つ言葉にはまた「こす」という動詞がある。音韻上「く」と「こ」が音転関係にある。若狭湾には「塩坂越」という地名があり、「しゃくし」と発音されている。漢字表記と結びつけて考えると、「しゃくし」は「しおこし」の音転にちがいない。「く」と「こ」は互いに音を転じることができるということから、「くす」と「こす」はもともと同一語であった可能性がある。そうだとすれば、それぞれの名詞形「くし」と「こし」も当然通じることになり、「こし（越）」という地名はそもそも「くし（櫛）」との関連で出来たのではないかと推測される。

「くし」の動詞形「くす」は「よこす」を意味し、「こし」の動詞形「こす」は「境界や障害を越えて進む」を意味する。この二つの意味から判断すると、鳥浜貝塚遺跡出土の赤色漆塗りの櫛を含め、「こし（越）」地域の「くし」はもともと「こし（越）」以外のところから、障害や境界を越えてよこしてきたにちがいない。大槻文彦氏の『大言海』(注3)は、「くし」の語源は「串」と通じ、朝鮮語の「こす」に由来しているという見解を示し、「くし」と朝鮮半島の関連性を示唆しているが、前述した「くす」と「こす」の当て字がいずれも「越」であることと、これから詳述する鳥浜貝塚遺跡出土の赤色漆塗りの櫛の特徴から、「くし」は中国長江下流域の「内越」からよこしてきたものと筆者は主張したい。

長江下流域の「内越」には櫛を飾る悠久な歴史があり、馬家浜遺跡から出土した象牙の櫛や良渚遺跡から出土した60件以上の「玉梳背」、角を連想させる28件の三叉形髪飾りなどがその証拠である。鳥浜貝塚遺跡出土の赤色漆塗りの櫛には二本大きな角がある。子鹿の角のように見える

が、実際、この角はまた長江下流域の特産品「越瓜」（末頁の写真２）と非常に似ている。「越瓜」はヒョウタン科（Cucumis melo L. conomon Group）で、日本語では「つのうり」と呼ばれる。縄文前期にヒョウタンなどとともに日本列島に伝わってきたのだと考えられるが、この「越瓜」と比較してみると、鳥浜貝塚遺跡出土の赤色漆塗りの櫛の角は全くその形をしているのである。

福井県には敦賀市がある。これまで、「敦賀」という地名は「つのが」に由来し、角のように海に突出している敦賀一帯の地形に基づいて命名されたと解釈されている。しかし「つのうり」の形からも分るように、縄文時代の人びとがイメージした角は決して尖っている三角形ではなかった。そして、敦賀市から小浜市にかけて海に突出している所はたくさんあるのに、なぜ敦賀市一帯だけが「つのが」と呼ばれていたのかという疑問も残っている。したがって筆者の考えでは、「つのが」は地形に由来しているのではなく、「つのうり」のような角を持つ「つのくし」に由来しており、「つのくし」のある所が「つのが」の原義である。

日本海側で櫛と関連する地名をさらに調べると、対馬には「峰町櫛」があり、島根県益田市には「櫛代賀姫神社」があり、太田市と松江市にはそれぞれ「櫛島」がある。さらに東の方へ移動すると、福井県敦賀市の「櫛川」と「櫛林」がそれらとつながっている。対馬と島根県の地名はいずれも櫛の島なので、長江下流域から櫛が伝わってきた時、これらの島々は中継地となっていたのではないかと推測される。古代現代を問わず、人びとが航海する際、島を中継地にするのがずっと原則であることから、頭に角櫛を飾った「内越」の人びとが長江下流域から日本列島の「こし（越）」へ航海してきた時も同じく、これらの中継地を経て上陸したのであろう。そして、その最初の上陸地は敦賀市の「櫛川」であったように思われる。まず河口を探し、それからその川を少し遡上して上陸したであろう。その後、頭に角櫛を飾った長江下流域の「内越」の人びとは定住し、そしてその周辺の林で活動していたので、のちにその林は「櫛林」と呼ばれるようになったのだと推測される。

要するに、「こし（越）」という地域名は長江下流域の櫛と密接にかかわっているし、若狭湾周辺の地名もまた「内越」の渡来や上陸を示唆しているので、若狭湾はまさに「こし（越）」地域の原点だと考えられる。もちろん、「内越」の人びとがなぜ若狭湾を最初の上陸地に選択したかといえば、そこが地形的に彼らの故郷である杭州湾と似ているほかに、縄文草創期から「外越」の人びとがずっとそこで生活を営んでいるということも非常に重要な理由であっただろう。第１節で述べたが、「内越」と「外越」はもともと同じく古越族に属し、東シナ海大陸棚に生活していた。しかし13000年ほど前、ammonia海進が発生し、東シナ海大陸棚が次第に水没したことによって、長江下流域に移転した「内越」と日本列島に上陸した「外越」に枝分かれしたが、縄文前期以降、「内越」と「外越」はまた若狭湾で再会した。「こし」という地域名の当て字として「越」が用いられているというところには、部族的同一性に対する双方の承認、すなわち「こし（越）」が「こし（越）」と呼ばれている所以が存在しているのである。

福井県とつながっている富山県には「櫛田」という地名がある。若狭湾に上陸した「内越」の一部はその後「外越」の案内でまた富山湾に移動していったと思われるが、ただこの「櫛田」の「田」が何の田であったかはまだ分らない。5500年前の長江下流域では、稲作がすでに普及し、いたるところに田んぼがあったので、その時代にそこから渡ってきた「内越」の人びとが「こし（越）」で稲作用の田んぼを開墾したと考えても全然おかしくないだろう。しかしこれまでに、縄文前・中期の「こし（越）」の人びとが稲を栽培した痕跡は見つかっていない。安田喜憲氏は『世界史のなかの縄文文化』(注4）と題する著作の第三章で酒詰仲尾氏の「クリ畑説」、すなわち縄文中期の縄文人は遺跡の周辺でクリ林を計画的に植え、クリを定期的に収穫していたという学説を紹介しているが、しかし、クリ林を縄文中期の人びとは本当に「田」と捉えていたかどうかという疑問がまだ残っている。実は、安田喜憲氏はまた『縄文文明の環境』(注5）と題する著作の第二章でこの問題を取り上げ、縄文前・中期に稲作が日本列島で普及・定着しなかった理由を具体的に指摘している。

> その第一の理由として考えられるのは、ドングリやクリあるいは豊かな海の幸さらにイノシシやシカなどに依存する社会が、稲作を必要としないほど豊かだったということがあげられる。
>
> 第二に稲をもたらした人々が、当初の段階ではきわめて少数であり、渡来人がコロニーを作って稲作を行なうほどの力がなかったと考えられる。稲作を行なうにはまとまった人口が必要であり、稲作にたけたある一定以上の人々の渡来がないかぎり、複雑な技術体系をもつ稲作を普及するのは困難であった。
>
> 第三に女性中心の平等主義に立脚した縄文社会においては、男性主導型の稲作を実施に移すのが社会的に困難であった…等々である。

以上にあげた三つの理由はいずれも理にかなっている。とはいえ、安田氏は以上の三つの理由を以って縄文中期の稲作伝来の可能性を完全に否定しようとはしておらず、「しかし、五〇〇〇年前の巨大な長江文明の発展の状況を見るにつけ、もっと早くから稲作をたずさえた人々が日本列島に渡来していた可能性はまだ捨てきれないと思っている。それは今後の研究をまつしかあるまい」と、同章の結末で彼はまたこのような補足説明を行っているのである。

新潟県には「櫛笥」という地名がある。しかし、この地名は縄文時代の地名としては新しすぎる。後世、貴族一般が櫛を使用するようになった後にできた地名だと思われる。新潟県と異なり、山形県と秋田県と青森県にはそれぞれ「櫛引町」があるが、福井県から富山県への「くし」の流れと結び付けて考えてみると、重要なことが一つ明らかになる。すなわち、福井県から富山県にかけての地域は一番先に櫛の生活を始め、のちに山形県、秋田県、青森県の人びとは順に先進的

な文化として「櫛」を自分の所に「引」いてきた。そしてこの「櫛引」行為が行われている過程において広域の「こし（越）」地域が形成され、若狭湾、富山湾、陸奥湾がその三つのセンターに変わったのである。

もちろん、「こし（越）」以外にも、「櫛」を含む地名がたくさんある。上述各県を除いて東北地方から見てみると、

宮城県：「馬櫛」（大崎市）、「櫛挽」（柴田郡）
福島県：「櫛ヶ峰」（耶麻郡）
群馬県：「髪櫛山」（群馬郡榛名町）
埼玉県：「櫛引町」（さいたま市北区と大宮区）、「櫛引」「櫛挽」（深谷市）
東京都：「櫛形山」（大島町）、「櫛ヶ峰」（神津島村）
山梨県：「櫛形山」（南巨摩郡）
静岡県：「村櫛町」（浜松市）
岐阜県：「生櫛町」（美濃市）
三重県：「櫛田町」（松阪市）
奈良県：「櫛羅」（御所市）
京都府：「櫛笥」（京都市上京区と下京区）
大阪府：「櫛屋町」（堺市）、「玉櫛」（茨城市）
兵庫県：「櫛田」（佐用郡佐用町）
香川県：「櫛梨町」（善通寺市）
徳島県：「櫛木」（鳴門市）、「櫛淵」（小松市）
高知県：「櫛ノ鼻」（沖ノ島）
愛媛県：「櫛生」（大州市長浜町）
広島県：「櫛ノ宇根」（江田島市）、「今櫛山」（庄原市）
山口県：「櫛ヶ浜」（周南市）
福岡県：「櫛原町」（久留米市）
佐賀県：「櫛田宮」（神崎市）
熊本県：「櫛山」（日奈久馬越町）
大分県：「櫛野」（宇佐市）、「櫛来」「櫛海」（国東市）
宮崎県：「櫛津町」（延岡市）

以上各県の地名には新旧それぞれの起源説話がついているとは思うが、縄文前期以降という大きな時代的流れにおいて捉えてみると、各地名の間には一定の論理的つながりがあることに気が

つく。

①宮城県と埼玉県の「櫛引」や「櫛挽」は山形県、秋田県、青森県の「櫛引」の延長線上にあり、「こし（越）」勢力の拡大の現れだと考えられよう。
②櫛山や櫛峰の意の地名が多く、これらはいずれも「天孫降臨」のように他のところから櫛を頭に飾った人びとが移転してきたことを意味している。
③「櫛来」「櫛海」「櫛津」「櫛生」「生櫛」などの地名は、海から櫛を頭に飾った人びとがやってきて、そして「櫛」が現地で「生」えたように彼らが移住してきたことを意味しているであろう。一方、「櫛梨町」は「櫛無し町」の意味で、櫛を頭に飾った人々はなぜ自分のところに来ないのかといったような焦燥感がその中に含まれているのである。
④「櫛田」や「櫛笥」など「こし（越）」地方と共通した地名も見られる。「櫛田」は「こし（越）」の「櫛田」を踏まえての後世の再使用だと思うが、「櫛笥」は前述したように縄文時代の地名としては新しすぎる。
⑤「櫛屋町」は櫛を売買するイメージを伴っており、中世以降の地名であろう。「玉櫛」は長江下流域の良渚遺跡では用いられていたが、ただそれは縄文前・中期の時点で大阪一帯に伝わってきたとは思えない。弥生時代以降の「玉櫛」に由来した地名かもしれない。

要するに、⑤と「櫛笥」は縄文時代と本質的にかかわっていないが、①～④は縄文前期以降の「こし（越）」文化の日本列島における伝播を示しており、「こし（越）」地域はもともと日本列島内の縄文文化の発信地であったということが浮き彫りになった。

4.「鉞」の現地化

「こし（越）」の越族的アイデンティティーを示すものは櫛だけではなく、「石鉞」もその一つであった。日本では「石鉞」と「石斧」が一般的に区別されず、すべて「石斧」と呼ばれている。しかし、「こし（越）」の越族的アイデンティティーを理解するためには両者を区別する必要がある。

> 石鉞・玉鉞は、基本的に両刃の扁平な石斧の形をしており、器身の上方に円孔を穿つものである。いわば「扁平有孔（磨製）石斧」・「扁平穿孔（磨製）石斧」と称するべきものであるが、木を伐るための肉厚両刃の磨製石斧とは異なるものである。扁平という点では「鏟」とも呼ぶことができるが、鏟は基本的に片刃であるので、両刃の鉞とは異なる。

日本の学者松浦宥一郎氏は「山形県羽黒町発見の石鉞について」と題する論文（注6）の中で、

以上のように「石鉞」と「石斧」の区別を説明している。非常に明瞭な説明である。

長江下流域では、現段階の最も古い遺跡は炭素14年代9700年～7500年前の上山遺跡であり、そこから打製石斧と磨製石斧がともに出土している。第２節で触れた炭素14年代8000年～7000年前の跨湖橋遺跡からも石斧が出土している。ただし、この二つの遺跡から出土した石斧には扁平な石鉞が含まれず、石斧自体にも孔が穿たれていない。

しかし、炭素14年代7000年～5500年前の河姆渡遺跡からは扁平な有孔石斧、すなわち石鉞が出土している。河姆渡文化研究者陳忠来氏はその著作『太陽神の故郷――河姆渡文化探秘』（注７）の第四章でこのように指摘している。

> ここで特に指摘しておきたいのは、河姆渡遺跡第三文化層から有孔石斧が出現したということである。この種類の石斧は扁平である。石斧全体がぴかぴかと磨かれており、製作が精緻である。そのほかに、遺跡の第一文化層から出土したＴ18①：３の「石耜」も実際にこの種類の石斧に属している。河姆渡遺跡の有孔石斧はその形状が後の良渚文化時代に大量に出現した有孔石斧、有孔玉鉞と同一規範から出たもののようであるが、河姆渡第三文層の年代は良渚文化より1000年以上古いので、ここにも前者と後者の伝承関係が認められる。

河姆渡遺跡の「有孔石斧」、すなわち石鉞はそのまま良渚遺跡の石鉞や玉鉞とつながっていると指摘しているが、筆者は全く賛成である。実は河姆渡文化に石鉞が出現した後、炭素14年代6500年～6000年前の馬家浜文化、6000年～5200年前の崧沢文化および5300年～4200年前の良渚文化はいずれも石鉞の製作を継承しており、そして良渚文化期から玉鉞が盛んに製作された。1986年、良渚文化の反山遺跡から大きな玉鉞（末頁の写真３）が出土した。高さ17.9㎝、厚さ0.8㎝、肩幅14.4㎝、刃幅16.8㎝、現在、浙江省文物考古研究所に収蔵されている。反山遺跡は良渚文化における最高ランクの貴族墳丘墓であり、その東南200メートルのところに、良渚文化の中心都城の跡地莫角山遺跡がある。反山遺跡と莫角山遺跡は4800年～4500年前の遺跡であり、その時期に良渚文化は最盛期を迎えていた。2007年11月29日、浙江省文物考古研究所は記者会見を開き、反山遺跡と莫角山遺跡を中心とした良渚都城の城壁が見つかったと発表した。良渚都城は円角長方形を呈し、城壁は東西1500～1700ｍ、南北1800～1900ｍ、総面積は290余万平方メートルという。この城壁の上限年代は5000年前後、下限年代は良渚晩期と断定されているが、筆者の推測では、この都城はすなわち良渚文化最盛期に建設されたものであり、その時の王様の高貴な身分と絶大な権力を示しているのが写真３のその玉鉞であった。実際、この玉鉞の正面には良渚文化特有の、太陽神と虎が合体したような神徽が刻まれており、この神徽のような顔の持ち主はすなわちこの都城の初代主宰者であったように思われる。

2008年１月31日から２月３日まで、筆者は広島大学文学研究科古瀬清秀教授のご紹介を頂き、

富山県埋蔵文化財センターを訪ね、関清所長とお会いした。そして、関所長のご案内で当センターの所蔵品、富山市内の縄文中期の北代遺跡、富山県朝日町の不動堂遺跡、不動堂遺跡や柳田遺跡の出土品を展示している朝日町の「まいぶんＫＡＮ」、境Ａ遺跡周辺およびヒスイ海岸を見学し、いろいろな発見があった。２月２日、「まいぶんＫＡＮ」で不動堂遺跡の出土品を見学した時のことであったが、突然小さな石鉞が目に入り、「あっ、良渚遺跡の王様の大玉鉞と形がよく似てるなぁ」と心臓が大きく鼓動した。実は2007月12月、筆者は『広島大学大学院文学研究科論集』第67巻に「中川代遺跡の石鉞と日向王之山の玉璧」と題する論文を発表し、その中で良渚遺跡のその大玉鉞について論じたばかりであった。興奮のあまり、急いで関所長と当館の学芸員高塩さんを呼び、ガラスの展示ケースからその石鉞を出していただいた。そして、自分の発見を関所長に説明すると、関所長も大いに喜んでくださり、その場で、みずから測定図を描いてくださった。末頁の写真４がそれである。

それは高さ4.7㎝、厚さ0.9㎝、肩幅2.6㎝、刃幅3.8㎝の石鉞ではあるが、写真３と比較してみると、形が非常に似ており、とりわけ刃部の湾曲と両端の外反りが全く共通しているのである。刃部の湾曲と両端の外反りはもともと良渚文化の石鉞や玉鉞の特徴であるが、日本の富山県朝日町の「まいぶんＫＡＮ」でそれと同じ型の石鉞を見たとは、夢にも思わなかった。長江下流域の「内越」と「こし（越）」地域の「外越」との古代交流を研究する上でこの石鉞は非常に重要な意義を持っていると思うが、このような大発見ができたのは、全く関清所長のおかげである。

小さな石鉞を手に取ってよく確かめてみると、刃部にも使用痕がなければ、上端部にも装柄痕がない。蛇紋石でできているが、石質が非常に細かく、しかも半透明の点紋があり、見た目は軟玉に近い。実際、5000年前までは玉の概念が今よりずっと広く、ヒスイ、軟玉、石英石、上質の蛇紋石、滑石などはすべて玉と見なされていた。もしこのような広い概念で見れば、この石鉞はまちがいなく「玉鉞」だといえよう。そして、この「玉鉞」を所持していた人は良渚王国のその王と深いつながりを持つ現地の王であったのではないかと推測される。

もちろん、良渚文化のその玉鉞と不動堂遺跡のその石鉞の間には大きな違いもある。良渚文化のその玉鉞には孔があるのに対して、不動堂遺跡のその石鉞には孔がないということがそれであるが、長江下流域の石鉞や玉鉞の孔は一般的に装柄時に紐を通すためである。すなわち、石鉞と玉鉞は装柄を前提とするものであり、石鉞あるいは玉鉞自体で使用することは想定されていなかった。しかし、不動堂遺跡から出土したその小さな石鉞は孔がなく、最初から装柄を想定していなかったことが明らかである。それはたぶん後世で言う「王牌」のような物であり、普段は懐に隠すが、必要な場合には取り出して相手に見せると、その神聖な威力で相手を平伏させていたのだと思われる。日本では連続テレビドラマ『水戸黄門』が非常に有名である。黄門様は悪人を懲罰する際、いつも最初は身分を明かさずに、護衛たちに悪人たちと戦わせるが、最後には必ず「葵の御紋」の「印籠」を「助さん」に取り出してもらって悪人たちに見せる。そして、それを

見た悪人たちはただちに「はぁーっ」と平伏して観念してしまう。不動堂遺跡から出土したその小さな石鉞は、すなわち黄門様の「印籠」のようなものであったように思われる。

日本の「石斧」と呼ばれている様々な出土品をよく観察すると、中国で言う「石斧」「石鉞」「石鏟」「石錘」「石錛」など様々な物が混在し、そして、大型化と小型化という二種類の変化が見受けられる。大型化の典型は「石錛」であり、秋田県上掄遺跡から出土した縄文前期の四本の大型石斧（末頁の写真５）がその例証である。四本のうち、最大のものは長さ60.2㎝、重さ4.4kgに達している。一方、小型化の典型は「石鉞」と「石錘」であり、前述したその石鉞のほかに、青森県三内丸山遺跡から出土した縄文前・中期の石鉞型・石錘型ペンダント（末頁の写真６）がその例証である。頸元に飾るペンダントだから、当然孔が穿たれ、この点では前述した「王牌」型石鉞と異なっているのである。

石鉞型と石錘型ペンダントの出土の大量さから判断すると、「こし（越）」の一部特殊な人が櫛を飾っていたことに対して、多くの一般人は石鉞型・石錘型ペンダントを飾っていたと思われる。ペンダントは現在単なるアクセサリーではあるが、古代では装飾性が第二義にすぎず、第一義は部族的アイデンティティーの表示であっただろう。もちろん、越族的アイデンティティーを示すペンダントにもランクの上下があり、富山県東礪波郡城端町西原遺跡から出土したようなヒスイでできた石鉞型ペンダントは当然蛇紋石などでできたペンダントより高級であり、それを頸元に飾った人の身分もそれ相応に高かったにちがいない。しかし、高いランクのペンダントでも、低いランクのペンダントでも、同じく越族的アイデンティティーを示しており、身分の高低よりも、共通した越族的アイデンティティーを確認し合うところに、その主な用途があったのであろう。

５．良渚文化の「璜」の面影

富山県朝日町の「まいぶんＫＡＮ」で、もう一つ大きな発見があった。すなわち不動堂遺跡より600年ほど古い縄文前期末の柳田遺跡の出土品の中で、長江下流域の良渚文化の玉璜と共通した石璜を一つ発見した。末頁の写真７がそれである。材質は滑石ではあるが、透明感がよく、5000年ほど前は貴重な玉だと見みなされていただろう。

末頁の写真８は良渚文化反山遺跡から出土した玉璜であり、柳田遺跡のその石璜と対照してみると、全体的な構図と下部中央に円孔が穿たれているという基本的なファクターが全く同様である。『富山県朝日町柳田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（注８）では、柳田遺跡のその石 璜は「垂玉」と判断され、「玦状耳飾上部欠損部分を再研磨し穿孔している」と解釈されているが、それは決して玦状耳飾の欠損品ではなく、最初から璜のつもりで製作されていたはずである。もちろん、良渚文化反山遺跡のその玉璜と比較すれば、柳田遺跡のその石璜は非常に簡略なように見える。しかし全体的な構図と孔の大きさから判断すれば、それは欠損品でもなければ、未成品でもない。

良渚文化反山遺跡のその玉璜に対する小型簡素化だと考えた方が妥当であろう。

実は、縄文前・中期の青森県三内丸山遺跡と縄文晩期の秋田市戸平川遺跡からも、石璜が出土しており、筆者は三内丸山遺跡展示室と秋田県立博物館でそれら（末頁の写真９と10）を見た。それらは柳田遺跡のその石璜と異なり、半円形水平辺の両端に孔が穿たれている。実は、写真10の石璜と形が非常に似ている玉璜が良渚文化反山遺跡からも出土しており、両者のつながりが強く感じられるのである。

要するに日本の「こし（越）」地域では、長江下流域の石鉞と石錘だけでなく、長江下流域の「玉璜」も小型化・簡素化されており、いわば長江下流域の「内越文化」に対する「外越化」が行われていたわけであるが、しかし、その用途には何の変わりもなく、相変わらず「こし（越）」の越族的アイデンティティーを示していたように思われる。

６．長江下流域の「内越」と「こし（越）」の「外越」との交易

以上の考察によって、長江下流域の「内越」が縄文前期から中期にかけて日本列島の「こし（越）」に渡来してきたことが客観的に証明されたと思うが、それでは、彼らはどのように、そして何の目的で「こし（越）」に渡来してきたのだろうか？

長江下流域の「内越」は日本列島の「こし（越）」へ渡来するとき、長さ10m、幅１mほどの丸太舟を用いていたと考えられる。跨湖橋遺跡からは8000年前の丸太舟が出土しているし、河姆渡遺跡からは丸太舟をこぐ7000年前の櫂が出土している。そして、若狭湾一帯の縄文遺跡からも縄文前期～晩期の大きな丸太舟や櫂が出土している。これらはみな彼らが航海して来た証拠であろう。日本列島の日本海側の海流（末頁の写真11）を確認すると分るが、「内越」の人びとはまず長江下流域の杭州湾から出発し、舟山群島を経由して黒潮に乗って北上する。それから黒潮の支流である対馬暖流に沿って日本海に入る。さらに海岸沿いの比較的細いコースで上陸地を探すが、最初に上陸地として選択したのは若狭湾であった。その後、富山湾、そして陸奥湾も定住地として選択していったわけだが、海湾を選択するという行為には、長江下流域の杭州湾を故郷とする彼らの生活経験が濃厚に投影されているのである。

もちろん、長江下流域の「内越」の人びとが黒潮に乗って北上するとき、対馬暖流に乗らず、黒潮本流に乗って鹿児島県や宮崎県の方向へ行くこともできたはずだ。しかし、結局彼らはその方向へは行かなかった。筆者はとくにこの事実を重視したい。黒潮本流を選択するか、それとも対馬暖流を選択するかの根本的な違いは、もう一度長江下流域に帰る意志があったかどうかということである。もし帰る意志がなかったなら、黒潮本流に乗ったであろう。鹿児島県、宮崎県方面には長江下流域へと逆流する海流がないので、黒潮本流に乗ったら、結局鹿児島県、宮崎県、高知県、和歌山県のどちらかに上陸するか、あるいはそのままずっと漂流していき、最後にメキシコ湾に漂着していったはずである。メキシコ湾岸のオルメカ文明も玉文明であり、オルメカ文

化と良渚文化の類似は、もしかしたら一部の黒潮本流に乗った長江下流域のボートピープルのメキシコ湾漂着に起因しているかもしれない。

しかし、対馬暖流を選択して日本海に入った「内越」の人びとはまた長江下流域に帰ることができた。リマン寒流を利用すれば、帰れるのである。写真11に示されている海流図は現在の海流を示しているにすぎず、気温が現在より７℃ほど高かった縄文前・中期では対馬暖流とリマン寒流は現在よりもっと活発であったように思われ、一度若狭湾か富山湾か陸奥湾に上陸した長江下流域の「内越」の人びとはまたリマン寒流に乗り、対馬海峡をくぐって故郷の杭州湾に帰ることができたにちがいあるまい。言い換えれば、長江下流域の「内越」の人びとは対馬暖流とリマン寒流をうまく利用して長江下流域と日本列島の「こし（越）」地域の間を往来していたのである。

そして、彼らの往来の目的は観光ではなかった。筆者の推測では、彼らはまず縄文前期、若狭湾で13000年前に東シナ海大陸棚で枝分れした同族の「外越」を探し当てて立脚地を築き上げた。それから、「外越」の案内で富山湾とその近くの「ぬなかわ」（現新潟県糸魚川市の姫川）まで北上して貴重な玉や蛇紋石を発見して、「内越」と「外越」の資源交易を成立させた。その年代はすなわち境A遺跡や長者ヶ原遺跡が示した縄文中期であった。

2008年２月２日、筆者は境Ａ遺跡近くの宮崎海岸（末頁の写真12）を見学し、太古からずっと蛇紋石やヒスイの原石などが富山湾の海流と荒波によって海底から無尽蔵に打ち上げられてきていることに大変驚いた。単調なリズムを以って打ち寄せては消える荒波をずっと見ていると、縄文中期の人びとが蛇紋石やヒスイの原石を拾っている風景が目の前に思い浮かび、深く歴史の悠久さにひたっていた。

日本の縄文文化研究家林謙作氏はその著作『縄文時代史Ⅰ』（注９）で紹介しているが、境Ａ遺跡から磨製石斧が合わせて36,213件出土しており、そのうち、完成品は157件、破損品は874件、未成品は35,182件あった。そして、93％強は蛇紋岩製石斧であった。この膨大な数の磨製石斧がすべて現地性を持っていることから、境Ａ遺跡は磨製石斧の製造センターであったことが判明したわけだが、しかしそこで製造された磨製石斧はどこへ輸出されたのだろうか？「こし（越）」地域内の流通はもちろんのこと、中部・関東一円ないし東北地方、近畿以西にまで輸出されていたこともこれまでの研究によって明らかにされた。しかし、36,213件という膨大な数字から考えると、以上の輸出範囲はまだ狭すぎる。海外への輸出も当然考慮に入れるべきで、境Ａ遺跡の最大の交易相手は長江下流域の「内越」であったのではないかと筆者は考える。すなわち、富山湾一帯の蛇紋岩磨製石斧をはじめ、種々様々な軟玉や滑石などを購買するのが「内越」の人びとの渡来目的であり、それらを購入した後、彼らはまたリマン寒流に乗って杭州湾へとそれらを運んでいったであろう。長年良渚遺跡の発掘調査に携わってきた蒋衛東氏はその著作『神聖と精緻――良渚文化玉器研究』（注10）の第二章で、良渚遺跡から出土した玉器の材質は透角閃石・陽起

石系統の軟玉が絶対的優位を占めているが、程度の差こそあれ、蛇紋石、葉蝋石、滑石などもそれぞれ利用されていると指摘している。筆者は彼が指摘した「蛇紋石」製器物の名称、数量および産地をとくに知りたい。今後、杭州湾一帯の6000年～4000年前の諸遺跡から蛇紋石製の斧や琮や璧がどれほど出土し、そして、それらの原材料が現地性を持っているかどうかについて引き続き調査を進めたい。

注

1）一篇目は『玉で結ぶ日本列島と長江下流域』（『広島大学大学院文学研究科論集』第66巻、2006年12月）であり、二篇目は『山形県中川代遺跡の石鉞と日向王之山の玉璧』（『広島大学大学院文学研究科論集』第67巻、2007年12月）である。
2）テキストは〔清〕王謨輯『増訂漢魏叢書〔二〕』（〔台湾〕大化書局、1988年４月）所録の『越絶書』による。『越絶書』には、「外越」の記述が合わせて６回ある。
3）大槻文彦著『大言海』冨山房、1935年９月。
4）安田喜憲著『増補改訂版・世界史のなかの縄文文化』雄山閣、1998年５月。
5）安田喜憲著『歴史文化ライブラリー・縄文文明の環境』吉川弘文館、1997年10月。
6）浅川利一・安孫子昭二編『縄文時代の渡来文化――刻文付有孔石斧とその周辺』（雄山閣、2002年10月）所収。
7）陳忠来著『太陽神の故郷――河姆渡文化探秘』寧波出版社、2000年12月。
8）『富山県朝日町柳田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』朝日町教育委員会、2006年３月。
9）林謙作著『縄文時代史Ⅰ』第七章第五節と第七節。雄山閣、2004年５月。
10）蒋衛東著『神聖と精緻――良渚文化玉器研究』浙江撮影出版社、2007年10月。

写真注

1）森川昌和著『鳥浜貝塚――縄文人のタイムカプセル』（未来社、2002年３月）からの転写。
2）www.foodmate.net/4images/5/2/7868.htmlからの転写。
3）陳同楽・陳江編撰『老骨董鑑賞袖珍手冊・良渚玉器』（江蘇美術出版社、1999年12月）からの転写。
4）筆者撮影、富山県朝日町「まいぶんＫＡＮ」蔵。
5）筆者撮影、秋田県立歴史博物館蔵。
6）筆者撮影、三内丸山遺跡展示室蔵。
7）筆者撮影、富山県朝日町「まいぶんＫＡＮ」蔵。
8）浙江省文物考古研究所編著『反山（下）』（文物出版社、2005年10月）からの転写。
9）同⑥。

10）同⑤。

11）www.h7.dion.ne.jp/~imagic/kairyuu.htmlからの転写。

12）筆者撮影。

写真 1

写真 2

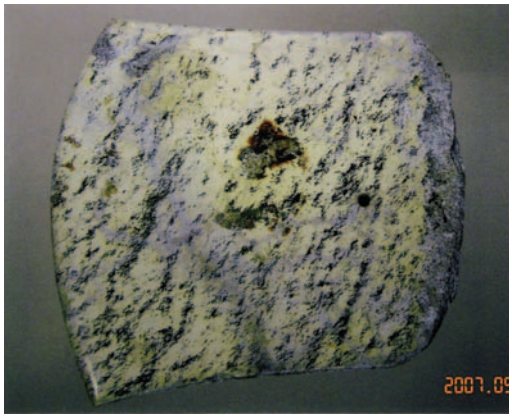

写真 3

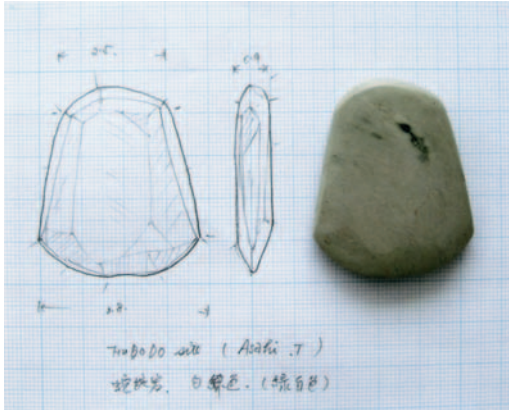

写真 4

写真 5

写真 6

写真 7

写真 8

写真 9

写真10

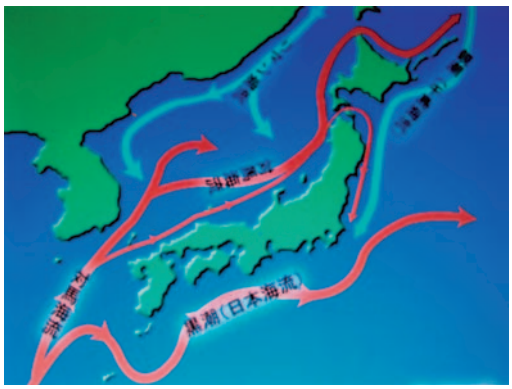

写真11

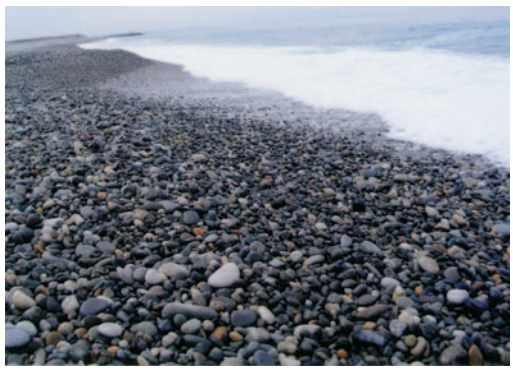

写真12

日本“越”的来历

李 国 栋

日本列岛的日本海沿岸有一个被称为“越”的地区。笔者认为，这个“越”与中国长江下游的“越”在种族、文化等方面有着极其密切的联系。

越族史书《越绝书》告诉我们，“越”有“内越”与“外越”之分。长江下游的“越”为“内越”，那“外越”又指何处呢？笔者认为，“外越”指的就是日本列岛的“越”。

日本福井县鸟浜贝冢遗址出土了一件红漆装饰梳（参看照片 1）。与这件红漆装饰梳同时出土了葫芦、菱角、绿豆、荏胡麻等植物，而这些植物皆非日本列岛原产。笔者认为，这些植物的种子，包括这件红漆装饰梳都是由长江下游的“内越”带过来的。

日本富山县朝日町不动堂遗址出土了一件石钺（参看照片 4）。其整体形状，特别是刃角外反特征酷似良渚文化反山遗址 M12 出土的神徽玉钺。其实，这种形状的石钺或玉钺在反山遗址还出土了很多。

日本富山县朝日町柳田遗址出土了一件石璜（参看照片 7）。柳田遗址发掘报告认为它是“垂玉”，由缺损玦的半边穿孔加工而成。但笔者认为它与玦无关，是一种简化的璜。而且它的整体构图与良渚文化反山遗址 M16 出土的五孔镂雕玉璜（参看照片 8）相通。

长江下游的“内越”利用“黑潮暖流”及其支流“对马暖流”来找日本的“外越”，其目的决不是探亲访友，而是采购日本“越”地盛产的玉料。当采购完毕后，他们又利用“利曼寒流”把玉料运回了长江下游。

以上就是笔者的考察和结论。